

中高生とともに差別と闘う

『レナの本音』

吉成タダシ (うずしおランチ代表)



前号、語り始めた「レナの本音」の続きです。

*

「はじめは、お父さんの方のおばあちゃんが反対したんだけど、なんで反対しなかったかというと、今まで部落の人と部落じゃない人が結婚して、部落じゃない方が子どもを置いて帰るっていう例があったらしくて。それがあったからおばあちゃんも反対したんだけど、実際そうやってしまいました。はは、よくわかんない！」

誤魔化すように力なく笑う笑顔は、笑顔になっていませんでした。

レナの生い立ち

レナの父親は地元のある地区出身、母親は隣の地区外出身でした。部落差別は、隣接するところが最も差別意識がきついと言われますが、まさに絵に描いたようなケースでした。結婚の話になったとき、母親のお腹の中にはすでにレナがいました。就学前こそ地区のある父親の地元の幼稚園に通っていましたが、小学校入学は隣の小学校となりました。それ以降も、毎年のように転校を繰り返します。

県外に転校することもありました。しかし、最初に県外に転校をしたときは、母親と別の男性と妹の四人でした。そんな状況を見かねた父親が、県外まで迎えに来てくれたときのことを、レナは「お父さんがスーパーマンに見えました」と言います。それ以降も県外での転校を繰り返しますが、その頃からレナは学校が

好きでなくなってしまう。そして、勉強が分らない口惜しさで、ほとんど行かなくなってしまう。小学三年生の冬の日。たまたま行った学校から帰宅し、家のドアを開けようとしたが、鍵がかかっていた。鍵を持つていなかったレナは、母親の帰りをドアの外で待ち続けました。

学校から帰ったのが二時半頃。雪は強い風に吹きつけられ、吹雪となつて舞い上がります。夜の七時頃、ドアの前で寒さに凍えうずくまるレナ。エレベーターのドアが開き、足音が近づいてきます。「お母さん！」と思いつくと、立っていたのはお父さんでした。レナは父親の優しい声で、やっと家の中に入ることができました。

その夜、レナは四〇度の高熱を出して寝込みます。隣の部屋では、帰ってきた母親と父親が、ケンカを繰り返しました。

そんな生活に耐えられなくなったレナは、ある日、父方の祖母に連絡をし、自分一人、祖母の家に身を寄せます。一年後には、妹も逃げるように身を寄せました。レナにとつての一番は、父母といふことではなく、大切にしてくれる人と一緒にいること。あたたかい家族に恵まれること。そして、幸せを感じられることでした。

みんなが被害者であり、加害者

そんなレナに、授業者である先生が尋ねます。「レナの母方のおばあちゃん、お母さ

ん方のおばあちゃんとは、今も関わりはあるの？」

「…ない、と思う。三、四年くらい行ってないし、関わりとも思わないの？」

「なんで関わりかと思わないの？」

「差別されてまで会いたくないし、別に行く必要もないと思う」

「お父さんとお母さんが結婚差別に遭つて、結婚したときにレナがお腹の中にいたんだよね。そのときはお父さんとお母さん、絶対愛し合つてたと思うの。今も、お父さんとお母さんのせいだと思ってる？」

「思わない。お母さんの親が悪いと思う。どちらかといえば」

すべては部落差別が招いたこと。母親や父親に責任がないとは言いませんが、部落差別意識による被害者です。それは、部落差別をした母方の祖父母や親族もそう。しかし、そう言つてしまつと、みんなが被害者のように見えますが、同時にみんなが加害者です。どこかで差別的輪廻を断ち切り、歯止めをかけなかつた、みんなの責任です。もちろん、行政も含めて。その被害を押しつけられているのが、一番立場の弱いレナであり、妹です。子どもたちは何の責任もないのに、その責任を無理矢理背負い込ませられているのです。こんなバカなことがあつていいわけがありません。

部落差別を語るミナコ

レナの発言にミナコが応えます。言い切れていなかった、自分と部落との関わりについて。

「私の親も結婚差別に遭つたけど、私は両方のおばあちゃんと会つてるし。レナはお母さんの方のおばあちゃんに行つたら差別されるって言つたけど。私は差別されてないけど、私もそんなのだったら会いたくない。うん、やっぱりわかつてもらう。お母さんの方のおばあちゃんにもわかつてもらわないといけないうつていうか、わかつてもらいたいの。」

私の場合は、今一緒にいるおばあちゃんも反対してただけで、いろいろ私も聞いたことはあつて。差別してるといふか…。

去年、小学校がすごく荒れてるらしくて、おばあちゃんのきょうだいと三人で一緒にいた時に、小学校が荒れてるのを、ほとんどがN町(地区の字名)の子だとか、そういうのを聞いたんだけど、そのとき何も言えなくて。あんまり、身内に強く言えないうつていうか、言つたことがないっていうか。そのときも、N町の子もいるかもしれないけど他の町の子もいるよ、みたいな。それぐらいしか言えなくて。それから、おばあちゃんとも話すのが嫌になつて…。

ていうか、おばあちゃんつてよく知つてるのよ、何でも。近所のこととか、誰がどこの人と結婚して、何してて、とか。何でそんなことまで知つてるのつて思う」

もうミナコに涙はありませんでした。春のときのミナコではありませんでした。